

## 産育習俗・報告

(お産の前後－学生たちによる聞き取り)

1993年度 日本福祉大の学生たちによる聞き取りより

編集 春日井 真 英

### Birth-ritual Reports

(Conformed by the students of Nihon Fukushi Daigaku)

edited by Shinei KASUGAI

Nowadays, it is very difficult to get any information about birth-rituals because of social, structural changes many people pay no respect for. Some young, in general, don't know about the rituals and their meanings, and the elder wouldn't like to give information about them. But the rituals are very important items to know and study Japanese folklore, and by the ritual-studies we can approach Japanese old and fundamental mentalities.

If we pay attention on these issues, we can find out the Japanese mentalities on new life, birth-ideas and the idea for death, that is, Japanese mentalities on "Life and Death". From such idea the editor tries to analyze Japanese mentalities on "Life and Death" by birth-rituals.

These reports are written by the students of Nihon Fukushi Univ. (日本福祉大学) in 1993. as a task of home work for summer vacation.

The first student wrote on the rituals of Okinawa, especially on Kawaori=川下り, which has a relation to Hashiwatari=橋渡り (Hashikoshi 橋越 rituals) and the relation suggests the importance of water elements to our life. The second student wrote on a life history of an old woman, who lived in Kochi-prefecture, and the third student wrote on rituals of Mie-prefecture and some superstition on twin babies. These three reports are very unique in respect of several rituals. This is why the editor picked up the three reports.

キーワード：産育、産後、とりあげ婆さん、川、禁忌（タブー）

## 〈目次〉

はじめに

聞き取りのために

レポート

- 1) 沖縄本島北部の産育習俗 91 F 504.9番 真栄田滝子
- 2) 産育習俗をきく 91 F 5098番 正木 直人
- 3) 産育習俗の問題について 93 F 9302番 鈴木 国幸

## 【はじめに】

本資料は、編者が以前、日本福祉大学で民俗学の講義をしていた際の夏休みの課題から「産育習俗の聞き取り」を選んでくれた学生たちのものである。内容的にそれほど期待していなかったわけだが、夏休み明けに事務局より渡された課題に眼を通すにつれ、彼らの予想以上のがんばりに驚かされるどころが大きかった。そのため、講師を辞めた後もこれら学生の課題は捨てることができず、ずっと手許に保存されていた。もとより、春日井の専門とするところはこの種の領域ではなかったがいつの間にか「産育領域」にまで手を染め始めていた。そして、「橋渡し」に関連するいくつかの論文、資料編をまとめる過程のなかで、昔の学生たちの努力を生かすことができるのではないかと思い、ここに編集してみることにした。

もちろん、ここで編集した学生たちの「聞き取り」はさほど専門的な指導を受けたわけではなく、また専門的な知識に基づいてまとめ上げたモノでもない。しかし、彼らの精一杯の努力のなかから「お産」に関わるいくつかの興味深い話が浮かび上がってくる。これらの聞き取りを資料としてまとめてみようとする契機は「水」、「食」、「自宅」という日常性と、それを受け入れる非日常性との接点が学生たちの視点から素朴ながら浮かび上がってくることによる。夏休みの間実家に帰省した折りにお祖母さんたちに話を聞きに行った人、産婆さんのもとに行った人などそれぞれであるが、彼らはそこで病院以外での出産の問題点、さらに「産む」ということについて様々な視点からまとめてくれている。そこには統一性というモノはないが新しい生命を受け入れる家族の姿に対する驚きを見ることができる。新しい生命の誕生は「葬」(死)に対峙するモノであるわけだが、「死」と背中合わせのなかで繰り広げられてきた人間の営みを精一杯聞き取って努力を評価したいと、遅ればせながらここで編集し、日の眼を見させたいと考える。ここに収録したものは誤字脱字をのぞいて修正、加筆はしていない。あくまで彼らの文体によるものであり、彼らの手になるものであることを確認しておきたい。

また、本学の学生たちによる聞き取り調査をまとめたものも手許にあるのでいつか日の眼を見させてあげられるようにしたいと考えている。

ところで、福祉大学の学生たちには、講義を通して産育習俗について一応の理解をして貰った。そのうえで、本学の学生たちが実施した聞き取りの質問表を配布した。基本的に学生たちがこれらをベースにして話を聞き、まとめ上げてくれたことになる。参考までに、春日井が1993年に東海学園女子短期大学、生活学科の学生たちを引率し、愛知県北設楽郡東栄町古戸に聞き取りを行ったときの質問表を載せておく。本来は、ここに年中行事に関する質問もあったのだが、割愛する。

#### 【聞き取りのために】（資料）

この調査では古戸地区のほぼ一年間の行事、また人生儀礼について話を聞いてもらわなくてはなりません。言い替えればそれだけ多くのことがらについて知ってもらうことになります。ですが、「だまって座れば話してもらえる」わけではないのです。話を引き出せるかどうかは「こちらの腕前次第」というところです。その人の歩んで来た歴史をたどるようにいろいろと聞いて見てください。ですが、プライバシーに関わるが多々出てきますので注意して下さい。

通婚圏の問題。

どこからお嫁に來られましたか。

同じ古戸？ それとも豊根？ 津具？……

あるいは婿養子だったのか？ <どこ出身ですか？> (< >内は、春日井が便宜的にこういう風に聞いてみたら、という意味で書いたもの。またはそこで用いられている言葉の解説である。)

<その人のお母さんはどこの人、どこからお嫁にこられた？>

<いま話を聞いている人の「歳」または「生年月日」>

結婚の相手とはどこで知り合うことになったか？

知り合ってから結婚までどれくらい時間があつた？

そのときの年齢は

このことは、地域がいかに他の地域と交流を持っていたかを知る手がかりになります。そして結婚相手をどういう風に得たかと言う問題とも重なります。

「柿の木」問答という言葉聞いたことがありますか？

<初めて相手の人を結婚相手と意識する際の言葉だと言われる。>

<「おまえの家にかきのきがあるか？」(実際あるか、無いかは別として)>

<「ある」と答えると結婚を受け入れると言う意味になり>

<「無い」というと相手の人を拒否する意味になると言われる。>

<そのような言葉のやり取りがあったかどうか、昔聞いたことがあるか？>

初産の年齢

子供さんの数

そのとき実家へ帰ってお産をしたのか、それとも嫁ぎ先の家でしたのか？

病院だった場合は、どこのくつまり県、あるいはなに市か？>

実家、あるいは嫁ぎ先の場合、赤ちゃんを取り上げたのは誰ですか？

その時どこで出産したのですか？

居間、寝室あるいは、どこ？

<家の間取り、見取図を聞き取ること>

どういう風なお産でしたか？

仰臥位<仰向けに寝てのお産>。立位<膝で立ったスタイル>。それとも他の？

<仰向けに寝てのお産はいま風です。>

<立位の場合、紐のようなものにすぎらなくてはなりません。それはどのような紐にすぎたのでしょうか。それは紐だったのでしょうか、それとも別の？>

背中に何を当てたか？

<ふとん？ たわら？ 何か別のもの？>

<たぶん年代によって異なります。>

人が産婦さんの背中からお腹をさすり、赤ちゃんを産む介添をした？

それは畳の上でしたか？

はい。 いいえ

では、下は板張りのまま？

灰布団？ ポロ？

へその緒は、どういう風にきりましたか

<たけべら、はさみ、ほうちょう あるいは何か別のもの？>

そのへその緒はどうしましたか？

<今でも、へその緒はみんなのものは家にあると思います。>

<みんなのへその緒が残されている理由はどこにあると思います？>

なぜ？ なにか言伝えがありますか？

赤ちゃんの「うぶゆ」。誰がつかわしましたか？

取りあげばあさん？ 家のおばあさん？ お母さん？

うぶゆをつかわしたのは

産んだ側の人でしたか？ それとも？

うぶゆはどこに納めましたか？ あるいは捨てましたか？

そこはどこでしたか

<例えば囲炉裏の側>そこは何という所？

あるいは 奥デイ（奥殿＝奥の間）

同じように後産はどこに納めるといわれています？ または納めましたか？

お墓とか、たたきの所とか

お産の前後の食事の特徴は？

<通常：おかゆ または繊維質のものの名前が出る。>

その理由として <古血がきれいになるなどと言う。>

<特にお産の後、ズイキ あるいは普通のお粥。>

梅干しはどうだったのか？ <ダメとされる所もあるそうです。>

では、味付けは？ 味噌・しょうゆ？

特に食べてはイケナイとされたものは何かなかったか？

<お産の前、四足のものあるいは兎、理由>

そのほかお産の前にはいけないこと、葬式に出てはいけない、とか。理由

やむを得ないとき、どの様にしたか？

赤ちゃんが産まれた後、どういう服を着せたか。その服には袖が通っていたか？

アカダキ、<隣近所のお婆ちゃんなどが赤ちゃんや産婦さんのお見舞いに来て赤ん坊を抱くこと>があったか？

その時の手土産は何か？ お返しは？

赤ん坊はその時どういう服を着せられていますか？

袖から手が出ていますか？

子供の名前は誰が付けましたか？

双子の時何か変わった事ありましたか？

双子を忌み嫌うという事ありましたか

これまで、この地区のどこかで双子が産まれたと事がありますか？

一軒の家でお産が重なると「いけない」と言うことがありますか？

<例えば、お嫁さんと娘さんのお産の時期が重なる＝どちらかが負ける>

お産に関するタブー、してはいけない。

例えば、ほうきを跨いではいけない。

なぜそう言われるか？誰かに言われたか

茄子を食べてはいけない

秋なすは嫁に食わずな

むしろすることを進める。

<トイレ掃除>きれいな子が産まれる。

させてもらえなかったこと

神棚のそばに寄ること

オクデー（奥の間）に入ることが禁止された

次のことは女性の生理のときの問題とも絡みます

<別火で食事をした。あるいは作ってもらった。>

<別火とは、その人だけのための火をつくってもらい、ほかの人はその火でつくった料理、お茶を飲まない。>

へその緒のことはすでに聞いたと思うが、

胎盤あるいは後産はどういう風に処理されたか？

どこかに捨てた？<それはどこか？>

<墓の近くに納めた>

わからない、

あるいは赤ちゃんを取り上げた人がどこかへ持っていった。

エナ(胎盤)＜後産＞買いがあったと聞いた。

どういうふうにされたときいているか？

産婦はいつまで、どこに寝かされていたか？

何日ぐらい寝ていることが許されていたろうか産後30日、あるいは

寝屋？ 奥デイ(奥の間)

その時の食事は？誰が用意してくれたのか。別火だったか？

乳の出が悪いとき、産婦さんには何を食べさせたか？

＜麦を煮た、煮じるを飲ますとかいうことは？＞

食べてはいけないもの何かなかったか？

また赤ちゃんにはどういう風に対応したか？

不幸にしてお七夜まで生きることができなかったこの場合

出産のとき旦那は、その部屋、あるいは家にいたか？

旦那と会ったのは産後いつのことだったか？

すぐ？ かなり、後？

何日ぐらい その理由は <汚れですか？>

お産をした部屋を出たのはどれくらいしてからですか？

<お産をしたらすぐ別の部屋へ移った？ そんなことはない。>

移ったとしたらどこからどこへ？

産後体を洗ったのがどれくらい経ってから？

水で洗った？ お湯に入った？

ただ流しただけ？ 拭いてもらった？

どこで？ だれに？

赤ちゃんを氏神様にお参りさせたのはいつごろですか？

男の場合、 女の子の場合

<例えば 33日、35日>

そのとき一緒に行った人は誰ですか？

お宮まで行きましたか？

それとも近くで引き返しましたか？

<鳥居先で>

氏子入りの式のような物はありましたか？

春、あるいは秋のお宮の大祭の時に御祓いを受けましたか？

「橋越の儀」と言うのがあったと聞きましたが、聞いたことありますか？

<子供が生まれてお宮へ御まいりするときに、必ず橋を渡って行き、その時に橋の渡った右の欄干から洗米とおさい錢をおいて、もどり、手前の左側の欄干から同じようにし、4本の欄干に洗米とおさい錢をおいていく>

この「橋越」あるいは「橋渡り」及び、産育に関連した習俗について春日井がまとめたものを以下に記しておく。また、現在これらに関連する資料をさらに調査、収集中である。

(Ⅰ)橋渡りの儀——愛知県北設楽郡に残る「産育習俗」について——

A Birthritual, which crossover a stream. 社会科学研究第19巻第1号(通巻第37号)  
中京大学社会科学研究所(発行所 成文堂)73~100頁(199頁)1999 B-5版

(Ⅱ)橋渡りの儀(その2)——愛知県北設楽郡およびその周辺に残る「産育習俗」について——

A Birthritual, which crossover a stream. 社会科学研究第19巻第2号(通巻第38号)  
中京大学社会科学研究所(発行所 成文堂)15~43頁(227頁)1999 B-5版

(Ⅲ)産育習俗資料

Data on Birth-rituals called Hashikosi or Hashiwatari, which range over  
Kitashitara District. 研究紀要 第7号 東海学園大学(2002)

(Ⅳ)産育習俗資料(その2)——愛知県の文献資料を中心に——

Data on Birth-rituals (ver. 2) 研究紀要 第8巻2号 東海学園大学(2003)



## 1) 沖縄本島北部の産育習俗

社会福祉学部3年 91F504.9番 真栄田 滝子

私は出身地である沖縄県の本島北部に住む72才の祖母に、お産にまつわる話をきいた。沖縄は小さくても部落によって言葉や習慣が異なるが、祖母は生まれ育ち、嫁ぎ先も本島北部なので、話は名護市近辺に限られる。また、比較と確認のために「沖縄民俗辞典」を参考にした。

女性は、結婚すると男の子を産むことが期待される。それは位はいや仏壇（トートーメー）を長男が継ぎ、清明祭や旧盆等の門中が集まる年間行事を長男がとりしきるためだ。祖先崇拜のさかんな沖縄では今だに「トートーメー問題」が活字となって世論を呼び起こすほど、伝統とときたりがある。男の子が生まれぬ、又はなかなか妊娠しない女性のためには、妊娠祈願をする。琉球王朝時代に城のあった首里のダルマ寺には、妊娠・安産祈願、水子供養に多くの人が訪れる。また、ユタと呼ばれる職業霊能者のもとへ行って祈願してもらったり、祈りの時米を使って、その米を炊いて食べたりする。昔はお産のあった家で炊いたご飯（ウバギー）をもらって食べることもあったという。妊娠祈願以外の占いや祈祷にもよく米が用いられる。何故米が使われるのかはよく分からない。

妊娠しても、女性は畑仕事や家事など、よく働いた。よく動かないと難産になるといわれていたようだ。犬が安産多産なのをあやかって、犬肉を食べたのは、祖母よりも一世代前までのことらしい。文献には、沖縄では妊婦に腹帯をしめさせることは無かったとあるが、現在ダルマ寺へ行けば腹帯がもらえる、と祖母は言うので、腹帯は戦後本土から入ってきたものかもしれない。

妊娠中の禁忌もいろいろあった。忌中の家からもらったものを食べると死産や障害を持った子が生まれる、ヒージャー（山羊）は早産するからよくない、シチラー（魚）は流産するから食べるな、等。第2次大戦後しばらくまで残っていた風習で、妊娠したもののいる家で新築または改築をする場合は、屋根の一部をふき残すことがあった。これは産道がふさがらずに安産するまじないであった。

出産の際には、現在では病院へ行くが、昔は産婆が家へ来てとりあげた。産婆はクァーナシミヤ（子供をうませる人）と呼ばれた。政府が指定する産婆制ができる前までは時にはサーダカサンチュ（靈感の強い人）と呼ばれた。本島北部でも、サーダカサンチュと同意語のウマリダカーという呼称が使われたようなので、ユタのような特別の能力を持つと信じられていた人が、多く産婆になっていたのだと思う。ちなみにユタと呼ばれる人は今でも多勢いて、人々の相談をうけている。家や親せきの重要な決定や、先祖供養にまつわる事に関して、多くの人が一度はお世話になる専門職といえると思う。

私の祖母が出産した終戦後しばらくまではほとんど産婆が出産を助けたようだ。家の仏壇の後ろ側に「ウラジャー」と呼ぶ産室を設けたようだ。文献によると、沖縄全域で母屋の台所に

近い座敷か、台所に近い裏座敷が産室として使われた、という。

産室の入り口には、縄がかけられ、ウラジャーにはジール（囲炉）が作られた。出産を終えた女性は一週間程はウラジャーで生活し、体内の汚れたものを出すために、夏であろうともジールの火にあたって汗をかかされたので、体中にあせもや吹き出物ができて、一目で出産後の女性と分かる程だったという。ウラジャーから出る日は忌みあけで、入口の縄をとりはずした。

お産の時に切ったへその緒は大切にとっておいて、子供がものごころついた頃に「ソー」を入れるために見せた、という。「ソー」というのは訳しにくい、「知恵」が近いと思う。

出産のとき出た胎盤は、まず台所にまつてある火の神に拜んでから、父親が屋敷の後ろで人が踏まない場所に埋めた。埋める際には「イヤワレー」といって、周りにいる赤子の姉や兄、門中の者が声をあげて笑った。それは赤子が愛嬌のある子に育つよう、願ってのことである。埋めたら、その土に大きくて重い石を置く。軽い石だと、身体の弱い子に育つ、と考えられている。今でも胎盤は産院で渡してくれると思う。私も弟のためにイヤワレーをやった記憶がある。

赤子が生まれた土地の川でお産の汚れものを洗ったり、その川の水をくんできて産湯を浴びせることをカーウリー（川下り）という。生まれた土地の川に宿る神が、その人の事を何でも知っていて、守ってくれるという信仰があり、大人になって別の土地へ引越しても、何か問題が起こった時には、ユタと共にその川へ行って祈願をする。それくらい生まれた土地に流れる川は大切に思われている。今ではこのカーウリーは簡素になったが、川への信仰は残っている。

日本全国同じだと思うが、沖縄でもお産は生命誕生の神秘的な現象であるために、民間信仰の色が強い。母から娘へ、姑から嫁へ、数多くのことが世代をこえて伝えられてきたが、生活スタイルの変化と共に簡素化されたり、無くなってしまったものも多い。お産にまつわる風習を知ること、昔の沖縄人の信仰や風土を理解する手がかりを得たので、ますます興味がそそられた。習慣や儀式の日取り等は、本土のそれと並べて考えるだけでは分からないことが多く、独特の伝統文化を知ることから始めなければ、特に私のような若い世代には理解できないと思う。改めて沖縄民俗の奥深さを感じた。

★真栄田のレポートで興味深いところは、男の子の出産が期待されるところであり、結婚祈願の際には「お産のあった家」で炊いたご飯を貰って食べるという記述である。また、産婆役の人間を靈感の強い人と呼んでいることである。このほか、「臍の緒」の考え方、胎盤の扱い方、火との関わりなど興味深い。それ以上に、「橋渡り」などを扱っている視点から考えると川つまり「水」とその土地に住む人との関わりの深さであると見なくてはならない。

## 2) 産育習俗をきく

91F5098 正木 直人

高知市内のある団地内にわずかに残った30坪ほどの土地をこつこつと耕して、野菜や花を作っている老婦人Aさんがいる。長女のいる団地にきてもう14年になるというが、もとは、県の東部、物部（ものべ）村市宇（いちう）といって徳島県境に近いところで林業を営む家に生まれた。19歳のとき近くの部落のやはり林業で生計を立てている人と結婚、20歳のときから6人の子供を産み、5人を立派に育て上げている。ご主人の浮気と酒癖の悪さで59歳のとき子育てを終えると同時に離婚し、長女のところに身を寄せている。生まれたときから山や畑、川で育ったので、市内でもこうして畑仕事でもしてないとたまらないという。この老婦人は思い出すように6人の子供のお産の様子を語ってくれた。

意外というか、不思議に思ったのは、何年に生まれた、というより、辰の年にだれだれを、寅の年に3人目を、巳の年に…というように干支で自分の子を産んだ年を覚えていたことである。3番目の女子は満一歳でハシカで死んだという。山奥で医者も居らず、富山の薬売りが置いていく熱冷ましをのませたら、「アーチャン、アーチャン」といいながら死んだという。他の5人はなんとか無事に育ったがと、今だに目頭を熱くして話してくれた。4人目が生まれたとき、体にも無理がかかるし、何より『貧乏人の子沢山はイランとおもうて』、昔からの言い伝えである「4才まで乳をしゃぶらせたら妊娠しない」ということを実行したが、またすぐにできてしまったという。主人は「スレスレ」（方言でプンプンのことらしい）して機嫌が悪かったという。

お産は今のようには病院ではなく、みんな自宅でやった。昔のお産といえば産婆さんがすぐにかんてくるが、いつも産婆さんが来るわけではなくその部落の最年長のお婆さんがやるが多かったそうで、“とりあげ婆さん”とよばれていた。また、夫がお産の手伝いをする場合もあったということである。男性はお産には立ち合わないというイメージを持っていた僕には意外だった。産婆さんがくるのは、よほどの難産のときだけだったそうだ。ただ、お産の場から男性を遠ざけるという習慣がなかったわけではなく、陣痛が始まっても男が近くにいるといつまでたっても産まれないといって、男性を遠ざけようとするのが一般だったようだ。

お産の様子は、聞いている男の僕にとってはすさまじいものであった。まず天井の梁に縄を張ってそれを握ってしゃがんで産み落としたという。そのとき肛門にぐっと力を入れて、だんだん間隔が短くなる陣痛に耐え続けるのだ。近所の人で10日間もこんな状態が続き、母親が危険な状況になったため、医者がはるばる下の街からやってきて、かずらの子供の首に巻き付けてひっぱりだしたという。子供はもちろん死産だがそれで母親は一命をとりとめたというのだ。彼女らにとってお産は自分の命をかけたものだったことがよくわかった。

他にも、他の部落では出血多量で死んだ女の人も珍しくはなかったという。Aさんの親戚

の人は、産まれる当日、たまたまご主人が遠くの山へ仕事にっていて子供とだけだったらしい。子供に近所の人を呼びに行かしたが、近所といっても田舎の山奥のこと、遠いのと子供の足で時間がかかったことや、子供のいうことで相手に緊急さが伝わらず、やっと近所の人を駆け付けけたとき、その女の人は、「目の前が真っ暗で見えん」といって死んだという。この人は初めてのお産ではなく4人目だった。こういう話はどこへ行っても当時は耳にしたという。Aさん自身もへその緒が絡まってでなくなって、産婆さんが必死にもみなおして出してくれて、助かった経験があるという。

当時の女性は産む当日まで所帯を切り回していた。Aさんもぎりぎりまで働いていたらしい。2番目の子供を腹に抱えたとき、腹の子が動いてこまったので腹を押しつけて、牛の草を刈ったこともあったという。土地の言い伝えとして、妊娠中だからといって動かないでじっとしているとお腹の子が大きくなって（太って）難産になる、というのがあったそうだ。これは、できるだけ嫁を動かそうという労働力の要求というのが本当の目的ではないかと僕は思うのだが…。「今の女の人は楽じゃ」何度も彼女の口からでた言葉である。昔はお産は命懸けだったのだ。

そんなたいへんな思いをして産んでも産後3日目からは、もう所帯をみんなしていたという。ただ、土地の風習として次のような禁忌が一応あったそうだ。

- ①出産から33日を越すまでは川へ入ったり、渡ってはいけない
- ②一週間以上たたないと“神のいる山”へ入ってはいけない
- ③お産をした部屋ではご飯を焚かない（雨のなか、傘をさして外でご主人が七輪でご飯を焚いたという）

川へ入るな、渡るなというのは、お産の際、血で汚れた身体で川へ近づくと‘水神様’が怒るためである。33日を過ぎると“汚れが消える”とされたそうである。たいへんな思いをして子供を産んだのに扱いはとてもよくなかったと述懐するAさんである。やはり、お産は汚らわしいものと考えられていたためだろう。しかし、それにしては夫が立ち会うことが（手伝うことが）あったというのは意外である。お産は汚らわしいもの、とはいえ、必要に迫られればタブーなどかまっていられなかったのだろう。男が立ち会わないという禁忌が必ずしも絶対的なものではなかったことを感じた。上に挙げたようなタブーも、比較的生活に余裕のある時代にいわれたことで、労働力の逼迫しているときや家庭では、タブーを侵さないことよりも生活のために働くことを優先させなければならなかったようである。

生まれた子供についても、双子や三つ子は忌み嫌われたという。昭和の初期に村で三つ子が生まれて‘鬼’といわれてそのお嫁さんは里に帰されたそうである。双子が生まれたときも、かならずどちらか一方は育たずに死ぬといわれていた。双子や三つ子を嫌う習慣は他の地方でよくあったことを聞いたことがあるが、自分の出身県であったことは初めて聞いた。赤ん坊の

‘へそのお’は、その家で大切に保存し、その人の人生のなかで最も危機とされるとき、具体的には、大病を患ったときなどに煎じて飲むと助かるとされていたという。

子供のできない女性は「子なし」「馬ツメ」といわれて実家に返されるのが通例だったそうだが、Aさんの地方では親戚から養子ももらって離婚されるようなことはなかったという。

Aさんからその後、自分のお産や子育ての経験から今の子供の生活や親の育て方について“子育て論”をきいたが言われる一つ一つのことを説得力があり、僕自身考えさせられることを学んだような気がする。Aさんは小学校をでただけで、いわゆる学歴はないが、Aさんの言葉には人間が生きていくうえで時代を越えた真実がふくまれていた。短い間のAさんとの話だったが、とても分厚い本を読んだ後の充実感を覚えた。

★正木のレポートで注目したいのは「死」と背中合わせの出産に目を見張る男性の視点であろう。劣悪と言っていい環境のなかで子を産み、育て、離婚した女性の話を真摯に耳を傾け、お産に立ち会う男性の姿に驚くところは素直と言うべきであろう。しかし、お産の場から男性を遠ざけるという習慣がなかったわけではなく、陣痛が始まっても男が近くにいるといつまでたっても産まれないとあって、男性を遠ざけようとするのが一般だったようだ。と、男性を遠ざける様子をきちんと押さえている。また、出産のスタイル、天井の梁に縄を張ってそれを握ってしゃがんで産み落としたと言う、座産の形式はいろいろと報告はされるが、生と死の境目にいる産婦の姿に驚く様子は今の病院での出産しか知らないモノには新鮮かもしれない。その中で、土地の風習として禁忌事項の記述、多胎児の出産にまつわる話は貴重と考える。

### 3) 産育習俗の問題について

社会福祉学部 社会福祉学科3年 93F9302番 鈴木 国幸

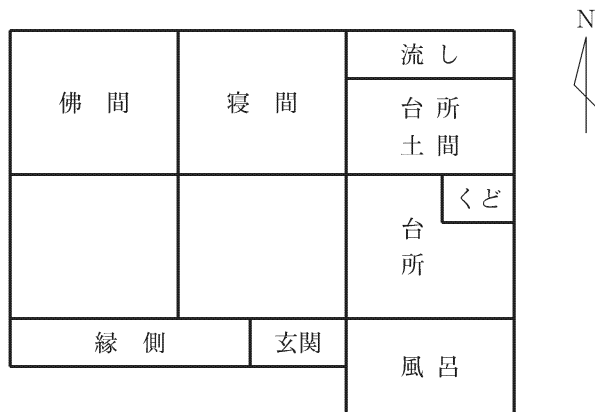
三重県のある村で大正3年生まれのおばあさんを対象にレポートしました。レポート形式は講義中配布された参考レジュメに沿って実施しました。

この方は隣町より婿養子として来ました。母は同県人です。結婚は親同士の意志で決定されました。21歳の時のことです。柿の木問答については聞いたことがないようです。

初産の年齢は23才で、子どもは8人います。お産は、嫁ぎ先の家の寝間で産婆さんが立ちあって行われました。家の間取りは以下に示しておきます。

お産のスタイルは今風の仰臥位。背中には特に何も当てなかったそうです。家の人は何の手出しもせず見守るだけだったそうです。お産は畳の上で行われました。下にはボロを敷くのみでした。

へその緒は、はさみで切り“これは誰々のへその緒”と名前を書いた紙にくるんで残しました。赤ちゃんのうぶゆは産婆さんがつかわし、産婦が寝ている所で行われ、うぶゆは木の下に



捨てました。後産は墓に納めたそうです。

お産前後の食事については、里芋の茎を食べると古血がきれいになるとされていました。白がゆに梅干しとしょう油味のズイキを食べ、4足の物は産後は食べないようにしていた。葬式に出ることも禁じられていました。

赤ちゃんに、袖の中に手がすっぽり隠れる産着を着せました。近所の人は、白身の魚（アジ）を持って見舞いに来てくれました。お返しは特にしなかったようです。

子どもの名は、父親が決めました。子どもが、双子であることは忌み嫌われていたようです。また、一軒の家でお産が重なると祝い事があるか、不幸が起こるかのどちらかとされていました。不幸な場合、父親が亡くなるなど言われていたようです。

お産に関するタブーでは、茄子はあくが強いから食べない。トイレに豆をまき、後日拾うとお産が軽くなるとされていた。食事はお産の日数に合わせて、おかゆの量が一日一日増加。エナ（後産）買いについては知られていないようです。産婦は、10日間ぐらい寝間で寝かされ、食事は自分の母親が用意してくれたということです。

乳の出が悪いときはお餅を食べ、食べてはいけないとされるものは特になかったようです。

赤ちゃんへの対応は寝かせたままでした。不幸にもお七夜まで生きることができなかった場合、葬式をしたようです。氏神参りをしなかったようですが、橋がかりの儀はありました。

出産の時、旦那は家にいて対面したのは翌日です。産後10日ぐらいしたら寝間から座敷に移ることができ、体を洗うのは寝間にいる時、産婆さんに体を拭いてもらうのみです。

★鈴木聞き取りは、ある意味で出産という問題を聞き取る際の男子学生らしい恥じらいを感じることができる。しかし、双子などの出産に関しては「最悪」の事例などを聞き取り、興味深い報告をしてくれている。また、海辺と言うこともあってか「魚」（あじ）を持っての見舞いというのは地域性であろう。

今回、ここで取り上げたレポートの特徴は、一地域、一人物の聞き取りを中心として扱ったものに限ってある。他の地域の例や文献引用が多々あったレポートは、例え内容がよくてもここには納めていない。そういう意味では地味なレポートしか取り上げていないことになるが、学生たちが彼らの身の丈の中で聞き取り、感じた「出産」という問題をよく顕しているのではないかと考えている。